動機

嘉那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
動機

【Ｎコード】
Ｎ９５７５Ｃ

【作者名】
嘉那

【あらすじ】
過去の事件から逃れるために、日本を離れた元モデルの莉乃。母の死をきっかけに帰国した彼女は、事件の真相を探る。サスペンス系ヒューマンドラマを目指します。ちょっとドロドロするかも・・・初めて小説を書きます。下手くそですが、暇な時に読んでみてください。

プロローグ

―　ここはどこだろう？

暗い森の中をただ歩いている。
どこへ向かっているのか、それすら定かではない。
体のいたるところがズキズキと痛む。
街頭ひとつない山道で、自分の手すらボーっと浮かび上がる白っぽいものにしか見えない。
きっとその腕は泥と血にまみれているのだろう。
顔も服も、全身が…
割れるように痛む頭は、まだぼうっとしていた。
それでも、私は歩き続けた。
暗闇ももはや恐ろしくなどなかった。
私は、殺された―もう恐れるものなど何もなかった。
ただ、生き延びようとする本能だけが私を突き動かしている。
もう一度だけでいい、一目でかまわない、会いたい愛おしい顔を思い浮かべる。
暗闇の中でも、瞼に焼きついた笑顔は鮮明に浮かびあがり、凍りそうな心には温かい感情が少しだけ蘇る。

そしてまた強く願った…生きたいと。

―　ああ。光が…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ルルルル…
電話が鳴る音で目を覚ました。辺りはまだ暗い。

「ふぅ…」
―　また、あの夢か…
最近はあまり見なくなった夢だった。
それでも、頬はいつものように冷たく濡れているのだった。
自然と枕もとの電子時計に目を向ける。０４：２６ＡＭ―日本はもう夜か。
少し嫌な予感を感じながら受話器をとった。

「Ｈｅｌｌｏ？」
こんな時間に電話してくるのは日本からに違いないとは思ったが、反射的に英語で電話を受けた。
相手は一度ひるんだように、一呼吸おいて尋ねた。
「…莉乃…莉乃か？」
やや緊張してはいるのだが、聞き覚えのある男の声に、莉乃は少しほっとして答えた。
「俊之叔父さん？」
電話越しに相手がホッとしたのを感じる。
「ああ…」
俊之はそれだけ言って、また押し黙ってしまった。
嫌な予感がした。
いつも優しく気さくな叔父のただならぬ雰囲気に、莉乃は戸惑った。
叔父が電話をかけてくるのは、よっぽどのことだろ。
―　母のことに違いない。
俊之が莉乃に電話をしてきたことはなく、母・百合が俊之に取り次いでくれることがたまにあるだけだった。
予感が確信に変わっていくのを感じていた。
重い時間がどれくらい続いたのか。
きっとほんのわずかの時間だったに違いない。
しかし、その重苦しい空気は、時間の感覚を狂わせ、ひどく長く感じられた。

決心した莉乃は、重い口を開いた。
「お母さんがどうかしたの？」
叔父は驚いた様子で
「えっ？…ああ…」
とだけ答えた。
「叔父さんが、こんな時間に電話をくれるなんて、お母さんによっぽどのことでもあったの？」
努めて優しい口調で問おうとしたが、その声は、自分が思っていたよりずっと冷たく響いたことに、莉乃は気付かなかった。
「姉さんが…死んだっ…」
電話越しで叔父は泣いていた。

第一話「帰国」

―ようこそ、日本へ―
そんな看板を莉乃は不思議な気持ちで見上げた。
3年半ぶりに踏みしめる、祖国の土。
もう、帰ることはないのではないかとさえ最近は思っていた。
今ここにいることさえ、信じがたいことだった。
日曜の空港は家路に就く観光客でごった返していた。
3年半前、ここからサンフランシスコに飛び立った日も、今日のように人でごった返していたな…と思ってすこしセンチメンタルな気分になったが、かつての出国ロビーは今いる到着ロビーとは違うと思い直した。
心の中で、少し、同じであって欲しいと願っているのかも知れない…
あの時に戻れたら…と。

―戻れたのなら、旅立っただろうか？
「ふっ…」
無駄な想像に自嘲気味に笑う。
“もしも”はいつまでたっても“もしも”だから。
―本当はもっと早く帰って来たかったの？
自身に投げかけた質問の答えは返ってはこなかった。
流れて来た荷物を確認すると、握っていたサングラスをかけた。
―必要ないかな…
一瞬思ったが、そのままにした。

空港から電車に揺られて、故郷を目指した。
田園風景を抜けて、少しずつ景色が騒がしくなってゆく。
窓の外には、代わり映えのしないビルの群れと、その袂を行き交う無数の人影。

ひとりひとりが何かを目指し、足早に去り、また訪れる。
―ああ、帰って来たんだ―
莉乃は実感していた。
無機質でどこの国も代わり映えしない空港よりも、広がる田園風景よりも、人で溢れかえった雑踏こそ莉乃の故郷だった。
莉乃の大嫌いだった、騒がしい世界。
それにすら郷愁を覚える自分に自嘲しながらも、そっと「ただいま」とつぶやいた。

3年半を過ごしたサンフランシスコは海辺の美しい霧の街だった。
莉乃もその町を気に入っていたし、一生を過ごすことになるかもしれないと思っていた。あの電話が鳴るまでは…
それでも、人が入り乱れるこの東京が莉乃の“帰る場所”なのだと、この胸の郷愁は物語っているようだった。

実家の最寄り駅を出て、少し歩いた。
騒がしい商店が立ち並ぶ駅前は、3年以上の月日を感じさせないほど変わっていなかった。
しかし、商店街を少し出ると、そこはかつての面影など微塵も感じさせないほどの変貌を遂げていた。
真新しいマンションがいくつか建ち、幼い李乃が遊んだ公園も、いくつかの古い民家も消え去っていた。
茫然として、サングラスを外し見上げてみたが、そこに故郷の面影はなかった。

「ねぇ、あれ、リリじゃない？ほら昔よく雑誌にでてたモデルの…」
向かいのオープンカフェにいた二人ずれの女の話声に、莉乃は驚いてサングラスをかけ、足早に立ち去った。
―まだ、覚えてる人いるんだ。
不思議な感覚だった。

確かに、莉乃は渡米するまで、女性向けファッション誌のモデルをしていた。
それなりに、人気もあったが、もう3年半も昔の話だ。
雑誌を手にする限られた層を除けば、決して有名人ではない。
―それでも、覚えている人がいるなんて…
嬉しい…だけど…絶対に知られてはいけない。
絶対に。
莉乃は実家へと足を速めた。

第二話「悲しい再会」

『スナック　Ｂｌｕｅ』
看板の電気はついていない。まだ夕日が差し込む時間だから、ではない。
ドアには張り紙がしてある。

お客様へ、
ご愛顧ありがとうございます。当店は一身上の事情により、暫く休業させていただきます。
蒼井

とだけ書かれていた。
風雨にさらされたその紙切れは、ずいぶんの時間の経過を想像させた。

―お母さん…
懐かしい、母の筆跡を指でなぞった。
―いつから？
問いたかった。
だけど…問うべき人はもうこの世にはいない。

裏に回ると、古びた民家になっている。
莉乃が二十歳で家を離れるまでの２０年間を過ごした家。
言いようのない切なさがこみあげ、息苦しさすら覚えた。
家の奥に明かりが見える。
―お母さん！？
はっとして、玄関に駆け寄り扉を開ける。
鍵は開いていて、奥から人影がゆっくりと近づく。

「莉乃！よく帰って来たな。」
優しい声の主は、電話をよこした人物だった。
「俊之叔父さん…」
叔父の姿を見て、ほっとしたのと同時に、言いようのない気持ちを持ち余した。
本当に母はいないのだと…
悪い冗談であってほしい。
しかし、叔父の顔は少しやつれて、ぐっと老けこんだように見えて、決して嘘ではないと語っていた。

奥の茶の間に通され、愕然とした。
そこで、母はとびっきりの笑顔を見せていた。
写真の中で。
見覚えがある。そう、最後に一緒に箱根へ温泉旅行に行ったときに写真だ。
母だけが拡大されているが、その隣には莉乃がいるはずだ。
中の良い母子を姉妹のようだと言って、旅館の仲居がとってくれた、二人でとった最後の写真だった。
ずっと、心のどこかで信じていなかった。
信じたくなかったのだ。
だけど、その百合の笑顔を見ているうちに、頬には温かい川ができていた。
―お母さんどうして？
その場にうずくまるようにして嗚咽を飲み込むしかなかった。

茶を運んできた俊之は、声をかけることもできないまま、テーブルのそばに腰かけ、握った拳を膝に強押しあてながら、俯いた。
美しく、やさしい姪の震える肩を直視することができなかった。
―神様、どうしてこの子ばかりが？
そして、俊之は誓った。

この子のためにできることは何でもしようと。

「ひっく…ひっく」

しゃくりあげる悲しみはまだ、尽きることはなかったが、大分落ち着いてきた。

辺りはもう薄暗くなっているようだ。

莉乃の様子を確認すると、俊之がゆっくりかみしめるように話し始めた。

「姉さんは、最近肝臓を患っててね…長年の酒のせいらしいんだけど、ちょうど去年の今頃かな、一回店で倒れて、そのまま入院したんだ。」

―去年？

「一年も前の話なの？どうして？どうして教えてくれなかったのよ？」

言いようのない怒りがこみ上げた。

それは俊之に対する怒りなのか、そうではないのかもう判断はつかなかった。

ただ、それをぶつける相手は俊哉しかいなかった。

俊之は、いつものようにやさしい目を細めて、だけどいつもよりずっと悲しい顔をして呟いた。

「言うなって…姉さんが…」

言葉に詰まりながらも俊之は続ける。

「何度も連絡しようとしたんだよ。俺だって人の子だ。でも、姉さんは教えてくれなかったんだ。お前の連絡先を。」

愕然とした。

―私は母に見放されたのだろうか？

―母は、私に看取ってほしくはなかったのだろうか。

動揺を隠しきれない様子の莉乃に、俊之はそっと言った。

「姉さんは、守りたかったんだ。お前を。わかるな？」

―わからない。

―わからない。
たった2人だけの母と娘が、どうして生きている間に再会できなかったんだろう。
莉乃は、俊哉の問いに答えずに、焦点を定めないような瞳で、遺影の前にそっと置かれた小さな袋を見つめた。

骨と灰。
たったこれだけの骨と灰が、この世に残った母の肉体が確かにこの世に存在した唯一の証。
「私は、遺体にすら会えなかった…ぅっっ…どうして？」
それは、俊之に尋ねたのか、百合に尋ねているのか、莉乃自身にもわからなかった。
俊之は、胸を引き裂かれるような気持ちに、握った拳に力を込めた。
「葬儀に、葬儀にもし、あの連中が現れたら？って…。俺は人の子だって言ったけど、人の親でもある。だから、姉さんの気持ちも、わかってしまうんだ。もう、お前にあんなことが起こらないように…」

第三話「追憶」

目を覚ました莉乃は天井を見つめてため息をひとつついた。
―やっぱり、夢じゃないんだ。
そう思うだけで胸が張り裂けそうになった。
起き上がり、とりあえずキッチンへ向かった。
百合の愛用していた食器や道具だけが主をなくし、役目を終えたようにひっそりと伏せてある。
莉乃が贈ったマグカップを手に取り、微かに染みついた茶渋を見つめた。
また、熱いものがこみ上げてきて、昨夜使い果たしたはずの涙はまた流れ始めていた。
しばらく経って、涙を拭うと、キッチンを見渡した。
百合が生きていた証はあちらこちらにあり、まだ温もりを保っているようで居た堪れなかった。

不意に空腹感を覚えた。
人間とは何と情けない生き物だろう。
どんなに悲しくても、苦しくても、腹が減るとは…
少しだけ愉快な気分になり、冷蔵庫に手を伸ばした。
冷蔵庫の中は、ほとんど空だったが、俊之が買っておいてくれたらしい食品がいくつか目にとまった。
中から、卵と牛乳を取り出し、朝食の支度をした。

ひとりで朝食を摂りながら、言いようのない虚しさとさみしさに襲われた。
―あの頃のようだ…
アメリカに一人辿り着いたばかりのころのような。
昨夜、帰宅する前に俊之は、明日も来ると言ってくれた。

あまり俊之に甘えるわけにはいかない。
けれど、ほかに頼れる人などいなかった。
平日の今日は仕事が終わってから来るだろうから、夕方だろうか。
莉乃はふと壁に掛けられた時計を見た。
―１０時前…これからどうしようか。

莉乃は百合の部屋に向かった。
本当は、まだ何もできる気がしない。
しかし、すべての整理をするのは莉乃以外にはいない。
俊之にこれ以上迷惑をかけるわけにはいかなかった。

母百合は１８歳の時に、厳しかった父親に反抗して家を出た。
百合はそのまま銀座でホステスになった。
堅い百合の父親・勲はそんな百合を許そうとはしなかった。
それでも百合の母親・時恵は百合を心配して、時々俊之を使いによこしていたそうだ。
七つも年下の弟にとって、美しい姉に会いに銀座まで行くことは、楽しみだったと俊之は言っていただろうか。
勲の気持ちが少しずつ譲歩したとき、事件は起こった。
百合が身籠ったのだ。
それが、莉乃だった。
百合は２３歳、銀座で押しも押されもせぬ人気ホステスだったころだ。
激怒した勲は、百合に父親は誰なのかを問い詰め、同時に堕胎を迫った。
奇しくも、それが百合と父親が直接向かいあった最後の場面となった。
しかし、百合は莉乃の父親を言わず、一人で莉乃を生んだのだ。
激怒した勲は、百合と完全に縁を切り、一度も莉乃を抱くことはなかった。

その後、時恵は床に伏しその3年後に亡くなるまで、百合と莉乃のことを心配し続けたという。
しかし、勲の手前表立った行動はとれなかった時恵は亡くなる直前、19歳だった俊之を呼び出して「二人を見守ってあげてほしい」と言ったという。
それ以来、俊之はずっとこの母子を陰ながら見守り続けてきた。
勲は知っていて何も言わなかった。
見捨てられない、でも許せない、そんな勲の不器用な愛情だったのかもしれない。
時恵もまた、そんな勲のことを知っていて俊之にそんなことを頼んで逝ったのかもしれない。

―私がしっかりしなくては。
久しぶりに足を踏み入れた母の部屋は、薔薇の香水の匂いがした。

第四話「シアワセと恋文」

思いがけなく、母の匂いに胸がいっぱいになる。
莉乃が知る限り、百合はずっと同じ香水を愛用していた。
強い思い入れがあったのだろうか。
５０代に足を踏み入れた百合は、現役のスナック『Ｂｌｕｅ』を仕切るママだった。
その部屋には、派手な洋服、毛皮のコート、着物、宝石、貴金属、そして化粧道具、ほとんどが仕事のための品だった。
それらを眺めながら、ぐっと切ないものがこみ上げた。
―お母さん…幸せだったのかな？
薔薇の香り纏って、店へ向かった百合は、いつも酒と煙草の匂いを連れて帰って来た。
莉乃が知る限りでは、百合に恋人はいなかった。
贔屓の客とたまにデートに出かけたが、決して家に連れてくることはなかった。
恋や愛だけが幸せではない。
それでも…莉乃は胸の奥にかすかにだけ残る、シアワセの温もりを思い出そうとした。
あの大きな温かい手…たった一人だけ、本当に愛した男。

百合はよく、『莉乃がいるだけでいい。莉乃が私の幸せ』と言っていた。
その莉乃を海外へと送り出し、最期さえ知らせなかった百合。
一体百合は何を思っていた…？

窓際には、遺影と同じ笑顔があった。
その隣で幸せそうに微笑む莉乃…

浴衣で寄り添う二人は、もう遠い過去のものになってしまった。
―母はもういない。そして、私はもうこんな風に笑えない…“あの事件”の後から…
気づくと、写真立てを手に取っていた。

「…ん？」
写真の裏に何か書いてある。
『この子は私が守ります。あなたが私にくれた宝物だから』
手紙…？
その宛名のない短い恋文は…決意表明…？
莉乃の父親に宛てた、莉乃への、ラブレターだった。

―『姉さんは…守りたかったんだ。お前を…』
俊之の言葉がフラッシュバックする。
―お母さん、愛してくれてたんだね…ありがとう…
部屋の隅に積まれた雑誌に目をやる。
―まだ取っておいてくれたんだ…
百合はいつも莉乃の載った雑誌を買い集めて、お客に見せびらかして、終いには売りさばいていたっけ…
「クス…」
笑ったとたん、下がった眼尻からまた、キラキラした滴が零れおちて、目の前が曇った。
―ああ…あなたもまた、手の届かない人になってしまったんだね、お母さん

第五話「回想」

―三年半前…
世間はゴールデンウィークと騒いでいるけれど、私には関係なかった。
相変わらず仕事は忙しい。

好きで始めた仕事じゃなかった。
ただ、ほかにできることなんてなかっただけ。
高校生の間、夜はずっと母の店の手伝いをしていた。
家計が苦しいのもわかっていたし、母ひとりにすべてを押し付けられるほど、莉乃は子供じゃなかった。
当然、勉強もできなかったし、できたとしても大学に行くお金なんてなかった。
母子家庭だし、仕方なかった。
大学に行きたいわけでも、何がしたいわけでもなかったけど、知っていた…母が、莉乃が夜の世界へ入っていくことを望んでいないこと。
だから、スカウトされたとき、迷ったけど、受けることにした。
高卒で、何の能力もない莉乃が太陽の下での駆け上がっていける道はそこにしかなかった。
百合は、喜んでくれた。
莉乃の『リ』とユリが銀座で源氏名として使っていた『リリー』を取って、芸名は『リリ』にした。

モデルをはじめて5年になる。
今では、月に2～3冊の雑誌とたまに広告の仕事をもらう。
忙しくなったけど、充実していると思う。
彼に出会ってから、前よりも仕事が楽しくなった。

いい表情［かお］するようになったって言われるようになった。
ずっとクール系とか持て囃されて、そんなイメージばっかりだった。
でも最近、もっと色々な物をやらせてもらえるようになった。
すごく幸せだと思う。
たとえ、彼との関係に未来なんかなくても…

いつもより早く仕事は終わった。
みんな連休中だし早く帰りたかったのかな。
私は、どうでもよかった。
彼は海外出張って言っていたし、たまには実家に帰ってみようか。
なんて考えながらスタジオを後にした。
マネージャの渡部さんはまだ来週の打ち合わせがあるみたい。
実家に帰ると決めたから、渡部さんにはそこで別れを告げた。

スタジオの出口は少し奥まった路地の中にあった。
タクシーを呼ぼうと大通に向かう。
その時―誰かが私の背後から近付いてきた。
相手が何人なのか、性別すらわからない。
でも、背の高い私より大きかったから、きっと男の人。
その瞬間…
「キ…」
叫ぼうとした唇は、布を握った手で押さえられた。
何かを嗅がされた私から、意識が遠のいていくのに時間はかからなかった。

体の痛みと息苦しさに目を覚ました。
体が動かない。
辺りは真っ暗で、頭が割れるように痛い。

朦朧とする意識の中で、拳を握る。
つかんだのは、湿った土のようなものだけ…
「―土」？
少しずつはっきりし始めた意識の中で、私は気付いた。
埋められたのだと。
幸い頭を上向きに、そして、かぶせた土を直後の雨が洗い流したため に窒息しなくて済んだのか、生きていた。
自由の利かない身体に鞭打って、少しずつ身体をずり動かした。
何時間かかったのだろうか、やっと自由になった手を使って、下半身に重くのしかかる泥をよけるようになると、急速に体に自由が戻ってきた。
這い上がったとき、もう体に力は残っていなかった。
自分がどこにいるのか、なぜこんなことになったのか、どこへ行けばいいのかわからなかった。
私にはこれより先の記憶がない。
どうやって、発見された県道までたどり着いたのか。
早朝に近くの村人が、野菜を市場に運ぶ途中で私を発見したらしい。
私が目覚めたのは次の日の夜、病院のベッドの上だった。

私は身分を示すものを何一つ持っていなかった。
医師と年配の看護師が1人いるだけの山間の小さな医院では、『リリ』を知る人はいなかった。
優しそうな、５０代位の医師は目を覚ました私に、殴られた形跡があると告げ、『明日の朝には、警察が来るから、安心しなさい』と優しく云った。
しかし、私は『警察』と聞いて、恐ろしくなった。

中学生の頃、一緒にいた友人が万引きで捕まった。
その時、彼女は泣きながら私に命令されたと云った。
私は否定したが、警察は“水商売”女の“私生児”のレッテルを私

に貼って、“家庭環境の良い”彼女を、“被害者”にした。
そんな話は、少なくなかったが、警察でさえ信じてくれないのだと思い知ったとき、私は心のどこかが氷ついていくのを感じた。

私の凍りついた心を少しずつ溶かしてくれた人…宗一郎…会いたい。
もう一度命を狙われるか、警察に捕まって長い時間拘束され、また屈辱を感じるのか…
―逃げよう。
そう思う足はもう、動き出していた。
ほかの入院患者の財布から2万円を抜き出し、置いてあった洋服に着替えた。
きれいに洗濯され、こびりついたはずの泥や血は目立たなくなっていた。
見知らぬ誰かの優しさに、胸は締め付けられたけれど、静かに外へ出た。
私は本当の加害者になってしまった…そう思って自嘲した。

『東京１００ｋｍ』の看板が立つ国道を、東京に向かって歩いた。
タクシーも走っていない。
電車の駅すら見つからない。
駅があったところで、終電は終わっているだろう。
一台の車が後方からやってきた。
必死の思いで車を止めた。
恐れはなかった。
失うものはなかったし、このままなら、本当に死ぬかも知れないと思ったから。
その車は野田ナンバーで、私は内心ガッツポーズをした。
中には若いカップルが乗っており、ホッと胸をなでおろした。

女のほうがすぐに莉乃に気がついた。

「リリ…」
頭に包帯を巻き、顔にいくつかすり傷があったが、顔自体は大きな損そうはなかった。
「こんばんは、撮影で事故にあっちゃって、でも、どうしても東京に帰らなきゃいけなくて・・・」
嘘の言い訳を並べると、女は疑いもせずに車に乗せてくれた。
男は、やや胡散臭そうな顔を浮かべていたが、女に押し切られる形で、乗せてくれた。
彼らは、長野の友人の結婚式に参列し、帰宅が遅くなってしまったらしい。
高速代も使い果たしたというあきれた二人は、国道を通って帰るらしい。
ちなみに彼女は明日仕事があるという。
私が一万円差し出し、高速に乗るように促し、車は高速入った。

車中で、女はいかに『リリ』のファンであるのかを、延々と語りだした。
私は、心底ついていると思った。
彼女が『リリ』を知らなければ、私はこの車に乗れたのかも危うい。
一通り話し終えると、女はスヤスヤと寝息を立て始めた。
運転している男に悪いかなとは思ったが、無言のままの二人の空気にいたたまれず私も目を閉じた。
うっすら目を開けると、東の空が白み始めていた。
車は一気に高速を降りて、男が言った。
「ここでいいのか？」
私は、「ありがとう」と伝え車を降りた。
男はポケットを探っている。
ペンを見つけると、彼女の鞄から雑誌を取り出して言った。
「サイン…書いてやってくれるか？コイツ仕事あるし、このまま寝かしてやりたいけど、このままアンタを帰したら後で何言われるか

わかんねぇからさ」
私はサインを書き、雑誌を男に手渡すと、男がさっきの高速代の残りを渡そうとした。
私は、それを断って、運転手の給料だと告げ、もう一度礼を言った。
なんだか清々しい気持ちになった。

―誰が私を殺そうとしたのか…
腑に落ちないことだらけだったし、恐怖が何度も身を縮ませた。
車で、『リリ』を知る人物に出会えたのは、よかった。
安心できていたんだと思う。
一人になった途端にまた、言い知れぬ恐怖に襲われた。
抱きしめて欲しい…
―宗一郎…
足は自然に彼のマンションへ向かっていた。
彼はまだ海外にいるはずだった。
それでも良かった、彼の匂い、存在を感じられれば。
財布も携帯電話もカギもなくしてしまった。
部屋には入れなくてもいい。
ただ、そこに行きたかった。

マンションの前にたどりつくと、誰かが出てくるところだった。
見慣れた、男が出てくるところだった。
―こんな早朝に人が？
怪訝に思って木陰から覗き込む。
―宗一郎！！
声をかけようとしたとき、後ろから女が現れたことに気づいた。
「怒らないでよ、いいじゃない。どうせ私たち結婚するんだし」
女が投げかけた言葉を聞いて、彼が少しずつ溶かしてくれた、心の氷が一瞬にして凍りつくのがわかった。
気づけば自然と実家に向かって走り出していた。

私と彼が結婚できないことは、わかっていた。
私もそんなことは望んでいなかった。
彼は大きな会社の御曹司で、私は私生児。
どんなにモデルとして成功しても、サラブレッドにはなれない。
ただ、ただ、彼が嘘をついていたことが許せなかった。
―海外出張―
信じた私がバカだったのだ。
何度も裏切られてきたじゃない。
どうして、もう一度信じてみようなんて思っちゃったのかな？
あの人だってどうせ、モデルを侍らせて喜んでる輩だっただけじゃない。

それでも、信じたかった。
大きくて、優しい手の温もりを…
「愛している」と言ってくれた、言葉を。

何で、私、生き延びちゃったんだろう。
あの山の中で、死ぬ運命だったのに。
そうすれば、こんなもの見なくて済んだのに。
幸せなまま逝けたのに…

第六話「母の秘め事」（前書き）

ちょっと現在と、過去が混ざりそうで、わかりづらいです…すいません。

第六話「母の秘め事」

夕日は傾き始めていた。
―こんなにあの頃のことを思い出したのは、何年ぶりだろうか。
あの事件の後、この家に辿り着いた李乃を百合は抱きしめて、泣いてくれた。
その涙を見たとき、莉乃の胸に熱いものが漲った。

―もう誰も信じない。でも、お母さんだけは、大切にしよう…
どんなに反対しても、お店を手伝おう。
もう、モデルには戻れない。
目立つことをすれば生き延びたことがばれてしまう。

数日後、傷の治療に専念して、家で寝たまま過ごしていた莉乃に百合は言った。
「外国に逃げなさい」
あまりに神妙な顔をしていたので、莉乃は何も言えなかった。
それでも、百合は続けた。
「あなたは、顔を知られすぎている。このままでは、また命を狙われるわ。母さん、あなたを失ったら、生きていけない。いけないの。だから、手が届かなくったって、生き延びてほしいの」
悲痛な願いだった。
自暴自棄になっていた莉乃は、百合が望むなら、それもいいかもしれない。
ゼロから始めてみるか…
仕事にも、恋にも、日本にも未練なんかなかった。
どこか遠くに行ってしまいたかった。
誰も知らないところへ行きたかった。
『蒼井莉乃』もモデルの『リリ』も知る人がいないところへ…

―何か引っかかる…
西日を見つめながら考えていた。
あの頃は、心に余裕がなかった。
でも、今改めて考えると…
―お母さんは犯人を知っていたの？

ガタっ！！
震える腕が机にぶつかり何かが落ちた。
―手帳…？
百合の手帳だった。
しかし、どう見てもおかしかった。
いたるところが破られたり、切り取られたりしている。
それも１冊ではない…４冊あった。
あの年から…
―母さん、何を隠そうとしているの？

第七話「決意」（前書き）

最後に「動機」という言葉が出てきました。タイトルの「動機」は莉乃が殺されかけた理由という意味でつけたので、深読みせずにスルーしてください。

第七話「決意」

さっきまで西向きの母の部屋に差し込んでいた日差しはもう完全に姿を消して、空はまた暗く先の見えない夜を迎え入れた。
夜働く百合は朝日の入らないこの部屋を自室にし、莉乃に南向きの部屋をあてがった。
お天道様の下を歩いて行きなさいというメッセージだった。
「あなたは、私とは違うのよ。明るい道を歩いていける人間なのよ。だって…」
帰宅した百合が、莉乃を学校に送り出す前に、朝日を見ながらたまにそう言った。
『だって…』の先は聞いたことがない。

どうしても、昔のことばかりが頭を過ぎった。
仕方がない…莉乃の時間はあの時から止まったままなんだから。
アメリカでの生活は、それなりに楽しかった。
はじめは、語学学校に通いながら、デサイナーの学校に通った。
5年間のモデルとしての経験は、デザインにも活きたし、語学の必要性は低かった。
何より、ほかにできることが浮かばなかった。
日本では高い莉乃の背丈もこちらでは標準だったし、日本でもてはやされた痩せた体は、こちらの人に言わせてば、セクシーさが足りないらしく、モデルとしてやっていくことは考えられなかった。
一年半も経った頃からは中堅デザイナーのアシスタントとして働き始めた。
時期尚早ではあったが、貯金も底を尽きかけていた。
それからは、何もかもを振り切るように、ただ毎日を忙しさで塗りつくした。
忙しさはつかの間でも充足感を与えてくれた。

それでも、胸に抱えた空虚な何かを払拭することはできないでいた。
周りの人々は気さくで、仕事の後はよくバーやクラブへ出かけた。
それでも、どこか人を信じきれない日々が続いた。
周りは言葉の壁のせいだと思っていたかも知れない。
莉乃も最初はそう思っていた。
しかし、言葉が流暢になっても、その壁は消えなかった。
それどころか、もっと心に入り込もうとする人を押し出すようになったのかもしれない。
温もりを求めて、関係をもった人もいたが、この状況ではどれも長くは続かなかった。
このままじゃいけない、そう思っても、どうしていいのかわからないままだった。

真っ暗になった部屋で、我に帰った。
時計に目をやる。
６：０８ＰＭ―
俊之が来るころだろうか。
食事の支度をしようと思い、キッチンへ向かった。
―そう言えば、朝から何も食べていなかったな…

―カチャ…
ドアが開く音がして、俊之が入ってきた。
「ほれ、莉乃の好きな、『北海』のお寿司買って来たぞ」
俊之は、二つの包を渡した。
「ありがとう、叔父さん。覚えててくれたの？今お茶入れますね。その辺にでも座って」
今日初めて、交わした言葉だということに、莉乃は気付かなかった。
二人で寿司をつまみながら、莉乃はアメリカに行ってからの話をした。

俊之はうんうんと頷きながらそれを聞いていた。
莉乃の話が一通り終わると、俊之は重そうな口を開いた。
「それで、莉乃…この先どうするつもりだ？アメリカに帰るのか？それとも…」
俊之がどんな答えを期待しているのかは、読み取れなかった。
莉乃は質問には答えずに、今日見つけた、写真の裏のメッセージと切り取られた手帳について話した。
そして、悲哀のこもった瞳を向けて俊之に尋ねた。
「お母さんは何か知っていたのかな？」
小さな表情の変化すら見逃さないように、俊之の顔を凝視した。
俊之は驚いた様子もなく、俯いて、ひとつ大きめの呼吸をした。
「叔父さんも何か知ってるの？ねぇ、そうでしょ？」
莉乃は俊之に詰め寄っていた。
俊之は少し困ったような表情をして、ぽつりと告げた。
「あぁ…姉さんは知っていたと思うよ。誰がお前を殺そうとしたのかを…でも、姉さんは教えてくれなかったんだ。」
俊之が悔しそうに拳を握ったのがわかった。
その肩は少し震えていた。

俊之は、隠しておきたかった。
きっとそれは、莉乃を幸せにするような事実じゃないことだけはわかっていたから。
俊之自身、百合が何を知っていたのかは知らない。
百合は、決して言わなかった。
百合はそんな女だった。
強くて、何でも一人で抱え込もうとする…そう、莉乃を生んだ時も。
父親の名前を決して明かさない百合に、何をしても無駄だった。
百合は隠すことが、ひとりで抱えることが、周りを守るすべだと信じて止まなかった。
それがどれだけ、俊之を傷つけたのかを百合は知らない。

俊之は何度も無力感を味わった。
大好きな姉は、乳飲み子を抱えて奮闘している時ですら、俊之のことを気にかけてくれた。
そのときから、俊之は決めていた。
見守ろう、と。
―でも、姉さん。あなたが守った秘密は、こうやってあなたの娘をまた苦しませているんだよ…
アメリカの話をする莉乃を見て、やるせない気持ちになった。
きっと幸せではなかったに違いない。
そして、たった一人の母親の最期すら看取れなかった莉乃。
歯がゆさと、切なさばかりが募っていった。

しばらくの沈黙を破るように、莉乃は呟いた。
「私は、知りたい。どうして、私は殺されたのか、どうしてお母さんはそれを知っていたのか、何で隠していたのか。」
この3年半、百合だけを信じてきた。
そんな百合すら莉乃を裏切っていたのか、そう思うと居た堪れなかった。
意を決した莉乃は続けた。
「知らなきゃ、前へ進めないの。」
囁くような声には、強い決意が込められているようで、瞳は、鋭く光っていた。
俊之は思った。
―あぁ、どんな動機でもいい、この子が前を向いてくれるなら、それでかまわない。
「俺にできることなら何でも言ってくれ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9575c/

動機

2010年10月9日01時02分発行